

【シンポジウム】

11月17日（日） 15:00～17:00

テーマ 「臨床描画と深層心理」

話題提供者 「児童精神科診療における描画の意味」 生地 新（北里大学）

「臨床場面でのバウムテスト」 木部 則雄（白百合女子大学）

「描画と文字—ラカン派精神分析の観点から—」 牧瀬 英幹（中部大学）

指定討論 北山 修（北山精神分析室）

司会 高橋 依子（大阪樟蔭女子大学）

児童精神科診療における描画の意義

生地 新（北里大学）

私は、子どもと対話をする他に絵を描いてもらうことが多い。スキイグル、樹木画や風景構成法等を使うし、「好きなもの描いて」「何でもいいから描いて」と言って描いてもらう時もある。親子同席の時は、親の話を聞きながら子どもに自由に絵を描いてもらうこともある。不思議なことに、子どもは、自分の抱えていている心の問題の全体を言葉と絵を通して、私たちに投げかけてくる。問題は、私たちがいかに感じ取って理解するかである。

臨床場面でのバウムテスト—子どもの精神分析的アセスメントでのバウムテスト—

木部 則雄（白百合女子大学）

子どもの精神分析的アセスメントにおいて、描画は重要な媒体である。初回面接時の最中にバウムテストを施行することで、それはその子どもの心的世界や親子関係を理解する上で大きな情報を与える。さらに、ここでの所見によって、子どもたちとのコミュニケーションがより活発になる。このシンポでは、この臨床実践を提示し、この意義について紹介する。

描画と文字—ラカン派精神分析の観点から—

牧瀬 英幹（中部大学）

我が国における「描画と文字」の歴史を繙くならば、そこに日本語という言語を用いて自らの存在を位置づけようと試みた先人たちの苦悩と創造の痕跡を認めることができるだろう。そうした痕跡は、現代を生きる我々の描画を用いた臨床実践において垣間見られる主体の無意識の問題と重なり合う部分を有しているように見える。本発表では、ラカン派精神分析

の観点を援用しながら、両者の関係性を浮かび上がらせるとともに、描画を用いた臨床実践において「文字」としての無意識の問題を考慮することの意義について検討する。